

共同研究を終えて

金 鉉 球

「6世紀の韓日関係」に対する共通の歴史認識を導き出すための研究を3年近く続けてきた。

古代の韓日関係を伝える基本史料としては、韓国側の『三国史記』と日本側の『日本書紀』がある。そのなかで『三国史記』には6世紀に入ると倭に関する記事がほとんど出てこない。一方、『日本書紀』には6世紀の両国関係を伝える多数の記事が見られる。従って、好むと好まざるとにかかわらず、6世紀の韓・日関係は『日本書紀』に依存せざるをえないようになっている。

6世紀の韓日関係は多様なチャンネルを通して政治、経済、文化など広範囲で成り立っていたと考えられる。従って、今後の研究は多様な分野の交流を二国だけの関係でなく、多国間関係として明らかにする方向に進むことに異議はない。しかし、当時の日本列島と韓半島との交流の枠組みといえる大和政権と韓半島各国との間の関係がまず明らかにされてこそ、他の交流の性格もより明らかになるものと考えられる。

6世紀の大和政権と韓半島各国間関係について、従来は『日本書紀』を基礎にして大和政権が任那を中心に韓半島に政治的影響力行使したという、いわゆる「任那日本府」説が通説的な地位を占めてきた。しかし、『日本書紀』に見られる国家間関係を象徴的に示す、人と物の交流の濃淡から判断すれば、大和政権と韓半島各国との関係は任那との関係を中心に展開したのではなく、百済との関係を中心に展開し、任那との関係は百済を助ける役割に止まるものとされている。これに対して日本では、そのような内容は『日本書紀』編者の見解にすぎないものであり、『三国史記』には6世紀の倭に関する記事が見られないという点を考慮しなければならないであるとか、『日本書紀』が百済系の史料を中心に成り立っており、加耶系史料が反映されていないため、『日本書紀』の関係記事にあまりに依存することは困難だという理由で、一過去の通説的見解が韓日関係の柱として打ち立てたが、今日では批判を受けている—『日本書紀』の関係記事に対する再検討に乗り出さずにいる。

『日本書紀』に百済系の史料が多く反映されていることは事実であるが、『日本書紀』に反映された百済系史料を除外しても、当時の大和政権と韓半島各国との関係が従来通説とは異なって百済との関係を中心に展開し、任那との関係は百済を助ける立場にあったという『日本書紀』の内容には大きな変化はない。そして『日本書紀』に任那系史料が見えないという事実が、大和政権と韓半島との関係が任那との関係を中心に展開したということの論拠にならないばかりでなく、百済系史料が中心となっているという事実が、『日本書紀』に大和政権と韓半島との関係が百済との関係を中心になされたとされている内容を否定できる理由にもならない。

大部分が6世紀以前のものであるが、『三国史記』には倭に関する記事が多く見られる。ところで、倭と百済との関係を示す内容は肯定的に描かれているのに対し、新羅との関係を示す内容は否定的な関係とされている。従って、5世紀を中心にした『三国史記』の内容も『日本書紀』に見られる6世紀の大和政権と韓半島各国間関係から大きく抜け出していない。そして広開土王陵碑文に見られる4世紀末～5世紀初の倭と韓半島各国との関係も『日本書紀』に見られる6世紀の大和政権と韓半島各国との関係と大きく異ならない。

歴史的事実を追求するためには、まず基本史料に対する批判を前提として推論がなされるべきである。このような点からも、6世紀の韓日関係は過去の通説論者が韓日関係の柱として打ち立てたが今日では批判を受けている『日本書紀』の関係記事の原形が何であったかを検討した後、「なぜ『三国史記』には6世紀の大和政権と韓半島各国との関係が見られないのか？」であるとか、「なぜ倭と加耶との直接的な関係は見られないのか？」ということなどを検討すべきであろう。それにもかかわらず、6世紀の倭との関係が『三国史記』には見られないであるとか、百済系史料が中心になっているという理由で、過去の通説論者が韓日関係の柱とした『日本書紀』の関係記事に対する再検討を留保することにより、結果的には既存の見解が命脈を維持できる道を残しているという点は心残りである。「6世紀の韓日関係」に対する共通の歴史認識を導きだすための少なくない成果にもかかわらず、共同研究の出発点とも言える6世紀の大和政権と韓半島各国との交流に関する、既存の誤った枠組みに対する論議自体がなされなかった点が残念なことである。